九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

母親の育児意識を構成する概念とそれに関連する要因

木村, 一絵
筑波大学

西内, 恭子
九州大学医学部保健学科看護学専攻

平野, 裕子
九州大学医学部保健学科看護学専攻

小原, 裕子

他

https://doi.org/10.15017/3276

出版情報：九州大学医学部保健学科紀要. 7, pp.69-76, 2006-03. 九州大学医学部保健学科
バージョン：
権利関係：

九州大学医学部保健学科紀要，2006，第７号，69－76
Memoirs Dep. of Health Scis. Sch. of Med Kyushu Univ., 2006, vol.7, 69－76

原　著

母親の育児意識を構成する概念とそれに関連する要因

木村一絵[1)]，西内恭子[2)]，平野（小原）裕子[2)]，髙田ゆり子[1)]

The Idea Forming Mother's Child-rearing Consciousness and Its Constituent Factors

Hitoe Kimura, Kyoko Nishiuchi, Yuko Ohara-Hirano, Yuriko Takata

Abstract

Child-rearing consciousness is the idea which has both positive and negative side, and has an important influence on mothers' child-rearing, so that children's growth and development of children as well. In this study we conducted a survey on 2151 mothers in all , out of whom 1122 have children at 18 months while 1029 have children at 24 months. We tried to extract the general which forms mothers' child-rearing consciousness and to clarify the factors.

On the basis of preceding researches, we collected 56 items concerning child-rearing consciousness. By the KJ method, 22 items were derived. As a result of the examination of the face and content validity, 20 items remained. Through GP analysis, I-T analysis and factor analysis, 4 items of them were deleted because their factor loadings were 0.3 or less. Amongst the 16 items, 5 factors were derived. These factors were named "child-rearing happiness", "child-rearing stress", "husband's support", "child-rearing confidence", and "feeling of being need to a child".

We tried to clarify the 5 factors. Factor of "child-rearing happiness" was related to Birth order and living together family. Factor of "child-rearing stress" was related to age of a child , birth order, living together family. Factor of "husband's support" was related to birth order, living together family. Factor of "child-rearing confidence" was related to birth order. Factor of "feeling of being need to a child" was related to birth order, living together family.

Key words：mother's child-rearing consciousness , children at 18 months,
children at 24 months ,child-rearing support, growth and development of children

和文抄録

育児意識は，育児に関するポジティブな意識とネガティブな意識（育児不安や育児ストレス）が含まれ，育児に大きく影響し，子どもの成長・発達を促進する母親の育児に関する意識である。本研究では，１歳６ヶ月児を持つ母親 1,122 人と２歳児を持つ母親 1,029 人の合計 2,151 人の母親を対象とし，母親の育児意識を構成する概念を類型化すること，また，類型化

１）筑波大学　２）九州大学医学部保健学科看護学専攻

された因子に関連する要因を明らかにすることを目的とした。

先行研究を踏まえ,「育児意識」について56項目が集められ，ＫＪ法でまとめ，表面妥当性の検討，内容妥当性の検討の結果，20項目となった。GP分析とＩ-Ｔ分析，因子分析を行った結果，因子負荷量が0.3以下であった４項目を削除した，育児意識(16項目)の因子分析の結果，５因子構造であることがわかり，第１因子は「育児の喜び」，第２因子は「育児ストレス」，第３因子は「父親のサポート」，第４因子は「育児に対する自信」，第５因子は「子どもから必要とされている感覚」と命名された。

５因子と関連する要因についての検討を行った。「育児の喜び」因子に関連したものは，子どもの出生順位と母親の年齢，同居家族であった。「育児ストレス」因子に関連したものは，子どもの年齢と出生順位，同居家族であった。さらに,「父親のサポート」因子に関連したものは，子どもの出生順位と同居家族であった。「育児に対する自信」因子に関連したものは，子どもの出生順位であった。「子どもから必要とされている感覚」因子に関連したものは，子どもの出生順位と同居家族であった。

Ⅰ　緒言

近年，育児に問題を持つ母親の増加により[1]，母親の育児を支援する活動が，地域の保健センターで盛んに行われている。

育児は大きな喜びを得る反面，親の身体的，精神的な負担が大きい[2]。つまり，母親の育児に対する認識,「育児意識」は，喜びなどの育児に関するポジティブな意識と,「育児不安」[3)~13)]や「育児ストレス」[14)~18)]に代表されるネガティブな意識がある。「育児意識」に関連している要因として，少子化や核家族化，父親の不在，家庭の孤立，母親の孤立なども挙げられている[19)20)]。育児への問題は，それらが複合した形で発生していると考えられる。

育児への問題を解決するために,「育児意識」に着目した研究において，幼児に対する研究は少数である。育児期間の中でも，幼児初期である１歳６ヶ月～２歳児は身体発達や精神発達の面で重要な時期であり[21]，歩行や言語発達などにおいて母親の「育児意識」は大きく影響する[22]。保健センターで実施されている１歳６ヶ月児健康診査や２歳児相談会は，運動機能，精神発達の遅滞などを持った幼児を早期に発見し,適切な指導を行い，心身障害の進行を未然に防止するとともに，地域看護を担う保健師が，育児中の母親に出会い，支援している機会となっている。

そこで，我々は１歳６ヶ月と２歳児を持つ母親の「育児意識」に着目した効果的な育児支援を行うために，母親の「育児意識」の構成概念を類型化し,尺度化して測定することで,それぞれの「育児意識」に応じた支援が可能になると考えた。今回はまず,「育児意識」を類型化することを試みた。そして，類型化された因子に関連する要因を明らかにしたので報告する。

Ⅱ　方法

1　育児意識の構成概念の類型化

育児意識の構成概念を類型化するために，図１のチャートに示した各ステップに従って，育児意識に関する質問紙を作成し，その信頼性と妥当性を検証した。

ステップ１　概念の明確化のために，先行研究を検討した。「父親のサポート状況」に代表される「育児環境」が「育児意識」に影響を及ぼすというBarnardら[23]の研究があった。育児に関するネガティブな意識については，吉田[24]が「育児不安」を母親の育児困難感や育児に関する不安や心配，自信のなさ，育児意欲の低下，母親が育児に関して感じる疲労感としてとらえる立場[25) 26) 27)]と，とらえていた。ポジティブな意識に関する研究はみられなかった。

ステップ２　概念の明確化の中で明らかとなっ

図１　育児意識に関する質問紙の
信頼性・妥当性の検証チャート

た「育児環境」[23) 28)～31)]と「育児不安」[3)～13)]，及びポジティブと考えられる「育児意識」を加えて，「育児意識」とはどういうことかを保健師4名で，2000年1月～4月の期間に11回にわたってブレインストーミング（ブレインストーミングはグループで自由に意見を出し合い，あるテーマに関する多様な意見を抽出する発想支援法）を実施した。その結果，育児意識に関する質問は56項目集められた。

ステップ３　56項目をKJ法でまとめた結果，「あそび」「しつけ」「母子関係」「父親について」の4領域に分けられ，質問の意味がわかりにくいもの，回答しにくいもの，共通認識が持てなかった項目を削除して，22項目とした。

ステップ４　表面妥当性については，プレテストとして，１歳６ヶ月～２歳児を持つ母親20名に22項目の質問に回答を依頼した。表現の難易度や実感にそぐわない内容がないかなどを2000年4月から5月に確認したところ，問題はみられなかった。

ステップ５　内容妥当性の検討のために，2000年4月から5月に，小児科医・心理専門家・保健師（3人）・保育士（2人）の合計7人の専門家に，質問項目が「育児意識」に関連しているかについて，検討を依頼した。その結果，関連が少ないとされた1項目と，同じ意味を表していた1項目を削除し，20項目となった。

ステップ６　質問項目決定のための分析項目分析のために，GP分析（good-poor analysis）とI-T（項目-全体）相関分析，及び因子分析を行った。対象は，A市在住の１歳６ヶ月～２歳児を持つ母親2,619名とし，2000年8月から2001年8月の期間に，20項目の質問紙を用いて郵送法による調査を実施した。回収方法は，保健センター来所時に，母親が持参した。調査協力への同意が得られた2,150名（回収率82.1％）質問紙を分析の対象にした。育児意識の質問項目は「とてもあてはまる」「すこしあてはまる」「あまりあてはまらない」「ぜんぜんあてはまらない」の４段階で評定され，４から１点を与えて整理した。逆転項目においては，１から４点を与えて整理するものとした。最も育児意識得点が高い場合は64点，最も育児意識得点が低い場合は16点となった。GP分析とI-T相関分析では，すべての項目において有意差がみられた（$p=0.000$，$p=0.000$）。因子分析では，Kaiser-Meyer-Olkin測度で標本妥当性があることがわかった（KMO＝0.872）。さらに，固有値1.002967の5因子構造で寄与率が35.278％，因子負荷量は0.252～0.700であった。そこで，因子負荷量が0.3以下の4項目を削除した。

最終的に「育児意識」の質問項目は16項目となり，これについて因子分析を行った。さらに，類型化された因子について，子ども（年齢・性別・出生順位）・母親（年齢・地域居住期間）・同居家族との関連をT検定を用いて検討した。

統計解析には，統計パッケージ SPSS 11.0 for Windowsを使用した。

2　倫理的配慮

質問紙にプライバシーは保護されることを明記した。質問紙回収時に，調査目的は育児支援をよりよく行うことや調査者以外の者がアンケート内

容をみることはないこと，すべて統計的に処理し，匿名性を維持すること，調査への参加は，自由で参加拒否の権利があること，不参加による不利益はなく，調査の処理終了後，すみやかに処分することを掲示し，口頭でも説明した。

Ⅲ　結果

1　育児意識の構成概念の類型化

表1　因子分析

質　問　項　目（16項目）	α=0.801	各因子の因子負荷					
		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	共通性
【第１因子】　育児の喜び	α=0.741						
子どもと過ごす毎日が楽しいと思う		**0.686**	0.317	0.079	0.108	0.067	0.593
子どもと遊ぶことが好き		**0.607**	0.255	0.111	0.202	0.121	0.501
子どもがかわいいと思う		**0.509**	0.120	0.074	0.071	0.070	0.289
子どもによく話しかける		**0.466**	0.108	0.140	0.217	0.204	0.337
子どもとあいさつをするようにしている		**0.403**	0.001	0.122	0.116	0.143	0.211
子どもの遊びをたくさん知っている		**0.383**	0.147	0.120	0.307	0.143	0.298
【第２因子】　育児ストレス	α=0.669						
子どもを育てるために我慢ばかりしていると思う（R）		0.130	**0.588**	0.061	-0.102	-0.043	0.379
子どものことでいらいらすることがある（R）		0.175	**0.548**	0.005	0.211	-0.080	0.382
子どもとの接し方で悩む（R）		0.096	**0.544**	0.032	0.219	0.013	0.354
育児にゆとりがないと思う（R）		0.174	**0.508**	0.112	0.295	0.077	0.394
【第３因子】　父親のサポート	α=0.688						
父親は子どもと一緒によく遊ぶ		0.114	0.092	**0.726**	0.053	-0.032	0.553
子どものことで父親とよく話し合う		0.228	0.044	**0.678**	0.126	0.126	0.546
【第４因子】　育児に対する自信	α=0.581						
しかり方が上手だと思う		0.201	0.199	0.080	**0.594**	0.051	0.442
ほめ方が上手だと思う		0.320	0.162	0.104	**0.497**	0.123	0.401
【第５因子】　子どもから必要とされている感覚	α=0.533						
子どもは困ったときにあなたに助けを求めてくる		0.193	-0.021	0.068	0.082	**0.670**	0.498
子どもはあなたの姿が見えなくなったらあなたを探す		0.116	-0.031	0.002	0.045	**0.525**	0.292
固有値		1.969	1.491	1.100	1.029	0.880	6.469
因子寄与率（%）		12.307	9.316	6.873	6.434	5.503	40.434

R：逆転項目

表2　属性

		N	%	M	SD
【子ども】					
年齢	１歳６ヶ月児	1122	52.2		
	２歳児	1029	47.8		
性別	男児	1087	50.5		
	女児	1057	49.1		
出生順位	第１子	1120	52.1		
	第２子以降	1026	47.7		
【母親】					
年齢（歳）				31.0	4.17
30 歳以下		975	45.3		
31 歳以上		1160	53.9		
【同居家族】					
核家族		1562	72.6		
拡大家族		533	24.8		
その他		51	2.3		
【育児意識得点】	（renge）				
第１因子	（12-24）			21.1	4.96
第２因子	（4-6）			9.6	1.97
第３因子	（2-8）			6.7	1.33
第４因子	（2-8）			5.1	1.04
第５因子	（2-8）			7.5	0.80

表3　子どもの年齢と母親の育児意識得点

		N	平均値	標準偏差	t 値	有意確率
第１因子「育児の喜び」	１歳６ヶ月児	1116	21.16	2.16	0.787	n.s.
	２歳児	1019	21.09	2.19		
第２因子「育児ストレス」	１歳６ヶ月児	1114	9.68	2.02	2.726	0.006
	２歳児	1021	9.45	1.92		
第３因子「父親のサポート」	１歳６ヶ月児	1103	6.68	1.36	-0.805	n.s.
	２歳児	1015	6.73	1.30		
第４因子「育児に対する自信」	１歳６ヶ月児	1115	5.13	1.05	1.755	n.s.
	２歳児	1020	5.05	1.04		
第５因子「子どもから必要とされている感覚」	１歳６ヶ月児	1119	7.51	0.81	0.529	n.s.
	２歳児	1025	7.49	0.79		

表4　子どもの出生順位と母親の育児意識得点

		N	平均値	標準偏差	t 値	有意確率
第１因子「育児の喜び」	第１子	1112	21.30	2.15	3.927	0.000
	第２子以降	1018	20.93	2.19		
第因子「育児ストレス」	第１子	1115	9.71	1.95	3.546	0.000
	第２子以降	1015	9.41	1.99		
第３因子「父親のサポート」	第１子	1098	6.79	1.36	3.057	0.000
	第２子以降	1015	6.61	1.29		
第４因子「育児に対する自信」	第１子	1112	5.24	0.99	7.301	0.000
	第２子以降	1018	4.92	1.07		
第５因子「子どもから必要とされている感覚」	第１子	1116	7.47	0.84	-1.977	0.000
	第２子以降	1023	7.54	0.76		

表5　母親の年齢と母親の育児意識得点

		N	平均値	標準偏差	t 値	有意確率
第１因子「育児の喜び」	30 歳以下	971	21.23	2.22	2.168	0.030
	31 歳以上	1152	21.02	2.13		
第２因子「育児ストレス」	30 歳以下	969	9.57	1.98	0.115	n.s.
	31 歳以上	1154	9.56	1.97		
第３因子「父親のサポート」	30 歳以下	955	6.69	1.38	-0.498	n.s.
	31 歳以上	1151	6.72	1.28		
第４因子「育児に対する自信」	30 歳以下	969	5.13	1.05	1.919	n.s.
	31 歳以上	1154	5.05	1.04		
第５因子「子どもから必要とされている感覚」	30 歳以下	974	7.50	0.82	-0.253	n.s.
	31 歳以上	1158	7.51	0.78		

表6　母親の同居家族（核家族・拡大家族）と母親の育児意識得点

		N	平均値	標準偏差	t 値	有意確率
第１因子「育児の喜び」	核家族	1548	21.05	2.18	-2.306	0.021
	拡大家族	532	21.30	2.18		
第２因子「育児ストレス」	核家族	1552	9.51	1.95	-2.207	0.027
	拡大家族	528	9.73	2.06		
第３因子「父親のサポート」	核家族	1558	6.81	1.20	3.486	0.001
	拡大家族	524	6.56	1.47		
第４因子「育児に対する自信」	核家族	1550	5.07	1.05	-0.958	n.s.
	拡大家族	530	5.12	1.03		
第５因子「子どもから必要とされている感覚」	核家族	1556	7.53	0.76	2.301	0.022
	拡大家族	533	7.43	0.90		

育児意識の質問項目（16項目）の構成する概念を類型化するため，因子分析を行った。Kaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性の測度は0.855で，因子分析する意味があることがわかった。Bartlettの球面性検定では，近似カイ2乗値は7119.648であり，有意確率p=0.000なので，観測変量の間に何らかの関連があることを示していた。

表１に示すとおり，５因子が抽出された。第１因子は「育児の喜び」，第２因子は「育児ストレス」，第３因子は「父親のサポート」，第４因子は「育児に対する自信」，第５因子は「子どもから必要とされている感覚」と命名した。

2　属性

５因子と有意な関連がみられたものを，表３～９に示した。子どもの年齢では，「育児ストレス」因子のみ有意差がみられ，１歳６ヶ月児を持つ母親の方が高かった。性別には関連がなかった。出生順位では，５因子すべて有意差がみられ，「子どもから必要とされている感覚」因子以外は，第１子を持つ母親が高かった。母親の年齢は，「育児の喜び」因子のみ有意差がみられ，30歳以下の母親の方が高かった。同居家族では，「育児の喜び」と「育児ストレス」因子で拡大家族の母親の方が有意に高く，育児に対する自信と子どもから必要とされている感覚因子は核家族の母親の方が有意に高かった。

Ⅳ　考察

本研究では，「育児意識」を類型化することを目的とした。そして，類型化された因子に関連する要因を検討した。類型化にあっては，「育児意識」の構成概念を類型化するために，図１のチャートに示した各ステップに従って，「育児意識」に関する質問紙を作成し，その信頼性と妥当性を検証した。その結果，16項目の「育児意識」に関する質問紙が作成できた。その標本妥当性は証明され，因子分析を実施した。その結果，５因子構造をとることがわかった。表１のとおり，第１因子は「子どもと過ごす毎日が楽しいと思う」や「子どもと遊ぶことが好き」といった項目が含まれたことから，「育児の喜び」と命名した。第２因子は「子どもを育てるために我慢ばかりしていると思う」や「子どものことでいらいらすることがある」といった項目が含まれたことから，「育児ストレス」と命名した。第３因子は「父親は子どもと一緒によく遊ぶ」や「子どものことで父親とよく話し合う」といった項目が含まれたことから，「父親のサポート」と命名した。第４因子は「しかり方が上手だと思う」「ほめ方が上手だと思う」といった項目が含まれたことから，「育児に対する自信」と命名した。第５因子は「子どもは困ったときにあなたに助けを求めてくる」や「子どもはあなたの姿が見えなくなったらあなたを探す」といった項目が含まれたことから，「子どもから必要とされている感覚」と命名できた。内的整合性は，第１・２・３因子に関しては比較的高かった。第４・５因子の質問項目が２項目であったため，内的整合性が高くなかったと考えられる。よって，この尺度は，本研究にのみに使用し，構成概念を類型化するためにはさらなる検討をかさねる必要があると思われる。

５因子のうち，「育児の喜び」と命名された因子は，ポジティブな「育児意識」に，「育児ストレス」と命名された因子はネガティブな「育児意識」に分類された。このことは，育児意識にはポジティブな意識とネガティブな意識（育児不安・育児ストレス）の両面で構成されていることが考えられた。また，「父親のサポート」が個別に分類することができる。これは先行研究[24]にもあるように本研究でも「父親のサポート」が育児意識を構成する重要な要素であるということを示している。今後は，この５因子が幼児期の子どもの発達にどのような影響を示しているか探ることが必要になる。

５因子と関連する因子の検討から，「育児の喜び」因子に関連したのは，出生順位と母親の年齢と同居家族であった。第１子を持つ母親の方が，「育児の喜び」が高いことは，初めての育児であることから喜びを認識しやすいためと考えられる。また，30歳以下の母親の方が「育児の喜び」が高いことは，若さから育児を楽しむことができること，また，拡大家族の方が育児に対する負担

が少ないことから「育児の喜び」を認識しやすいと考えられた。また，「育児ストレス」因子に関連したのは，子どもの年齢と出生順位，同居家族であった。１歳６ヶ月児を持つ母親の方が，喜びを認識しやすいことから「育児ストレス」が低いと考えられた。また，第１子を持つ母親の方が，初めての育児であり一人の子どものみの育児であることから，「育児ストレス」が低いと考えられた。さらに，核家族より拡大家族の母親は，同居家族によって育児支援を受けられるので「育児ストレス」が低いと考えられた。「父親のサポート」因子に関連したものは，出生順位と同居家族であった。第１子という初めての育児体験から，父親の育児サポートを受けやすいことが考えられた。また，核家族の場合，「父親のサポート」に依存せざるを得ない状況がうかがえた。「育児に対する自信」因子に関連したものは，出生順位であった。第１子を持つ母親の方が「育児に対する自信」があることは，育児に対して前向きにとらえているからであると考えられた。「子どもから必要とされている感覚」因子に関連したものは，出生順位と同居家族であった。第２子以降の子どもを持つ母親や核家族の母親の方が「子どもから必要とされている感覚」が高く，このことは同居家族に大人が少なく子どもが多い方が子どもから必要とされやすい傾向にあることと考えられる。

よって，「育児意識」に関する質問紙の作成に関しては，ある程度の信頼性と妥当性が得られ，本研究においては使用できるものとした。今後は基準関連妥当性を検証し，別の母集団でも追試していきたい。また，類型化された「育児の喜び」「育児ストレス」「父親のサポート」「育児に対する自信」「子どもから必要とされている感覚」の各側面への影響を考慮しながら，子どもの発達への影響を評価することが必要であると考えられる。

引用文献

１）大日向雅美：育児に伴う母親の不安。小児看護12（4）：415-420，1989.
２）前川喜平：育児支援。日本新生児学会雑誌35（4）：740-742，1999.
３）川井尚，庄司順一，千賀悠子，加藤博仁，中村敬，安藤朗子，谷口和加子，佐藤紀子，恒次欽也：子ども総研式・育児支援質問紙（試案）の臨床的有用性に関する研究。日本子ども家庭総合研究所紀要36：117-138，2001.
４）川井尚，庄司順一，千賀悠子，加藤博仁，中村敬，恒次欽也：育児不安に関する臨床的研究Ⅲ―育児困難感のプロフィール評定試案―。日本子ども家庭総合研究所紀要34（旧誌名日本愛育総合研究所紀要）：93-111，1998.
５）川井尚，庄司順一，千賀悠子，加藤博仁，中村敬，谷口和加子，恒次欽也，安藤朗子：育児不安に関する臨床的研究５―育児困難感のプロフィール評定試案―。日本子ども家庭総合研究所紀要35旧誌名日本愛育総合研究所紀要）：109-143，1999.
６）川井尚，庄司順一，千賀悠子，他：育児不安に関する臨床的研究2－育児不安の本態としての育児困難感について。日本総合愛育研究紀要32：29-47，1996.
７）川井尚，庄司順一，千賀悠子，他：育児不安に関する基礎的検討。日本総合愛育研究紀要30：27-39，1993.
８）高橋種昭，中一郎：母親の精神衛生に関する研究―育児不安を中心として―。児童研究55（１）：53-81，1976.
９）八幡雄一郎，畑栄一，佐藤千枝子，岩永俊博：育児不安に関する要因の検討。日本公衆衛生雑誌46（7）：521-531，1999.
10）福本惠，桝本妙子，堀井節子，小松光代，塩見武雄：育児不安の実態と関連要因の検討（第1報）～1歳６ヵ月児の母親へのアンケートから～。京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要8：155-162，1999.
11）恒次欽也・庄司順一・川井尚：いわゆる育児不安に関する調査研究（2）―新資料による「育児困難感」の規定要因に関する研究―。愛知教育大学研究報告　第49輯（教育科学）：123-129，2000.
12）庄司順一，谷口和加子：育児不安。保健の科学40（4），1998.

13）川井尚，庄司順一，千賀悠子，加藤博仁，中野恵美子，恒次欽也：育児不安に関する基礎的研究。日本総合愛育研究所紀要30：27-39，1994.
14）Abidin R R：Parenting stress index，（Third edition）Psychological Assess Ment Resources Inc．Odessa，FL，1995.
15）田中宏ニ，難波茂美：育児ストレス尺度の作成。岡山大学教育学部研究収録 106：179-183，1997
16）高澤みゆき，松井浩子，井上果子：母親の育児意識とわがこに対する感情　面接調査の結果から。横浜国立大学大学院教育学研究科教育相談・支援総合センター紀要　創刊号：57-76，2002.
17）佐藤達哉，菅原ますみ，戸田まり，他：育児に関するストレスとその抑うつ重要度との関連。心理学研究　64：409-416，1994
18）手島聖子，原口雅浩：乳幼児健康診査を通した育児支援：育児ストレス尺度の開発。福岡県立大学紀要１：15-27，2003.
19）我部山キヨ子：精神面からの援助（育児不安）。ペリネイタルケア8冬季増刊号：1644-1651.
20）織田正昭：特集新しい視点Ⅲ　最近の育児に対する問題と対応　1都市化と育児。小児科臨床46（4）：255-263，1993.
21）日本看護協会編：第９版　保健婦（師）業務要覧。日本看護協会出版会：161-165，2001
22）波田弥生，山崎初美，杉本尚美，木村美登理，毛利好孝：乳幼児健康診査における子育て支援の観点からみた要経過観察者のスクリーニングのあり方について。日本公衆衛生雑誌52（10）：886-897，2005
23）Barnard，K.E.，Bee，h.d.&Hammondo，M.A.：Home environment and cognitive development in health，low-risk sample；The Seattle study，In Gottfried，A.W.：Home environment and early cognitive development，Academic Press，1984
24）吉田弘道：育児不安の評価。小児内科31（5）：760-763，1999.
25）牧野カツコ：乳幼児をもつ母親の生活と「育児不安」。家庭教育研究所紀要3：34-55，1982.
26）佐々木英子，清水凡生：乳児をもつ母親の育児不安について。小児保健研究45：290-293，1896.
27）佐藤達哉，菅原ますみ，戸田まり，他：育児に関するストレスとその抑うつ重症度との関連。心理学研究６：409-416，1994.
28）安梅勅江：少子化時代の子育て支援と育児環境評価，川島書店，東京都，1996.
29）安梅勅江：育児環境の評価法の開発及びその保健福祉学的支援に関する研究―18か月児育児環境の把握と支援。日本保健福祉学会誌1（1）：13-25，1994.
30）上田礼子：日本版・乳幼児の家庭環境評価法-JHSQ-，医歯薬出版株式会社，東京都，３-51，1998.
31）佐々木吉子，上田礼子：育児環境と乳幼児の発達　乳幼児健康診査の場から。保健婦雑誌54（4）：310-314，1998.